

## 作家モルドヴァ・ジョルジ自作を語る

飯田 緑

1986年の「ラジオ・キャバレー傑作選」には、お笑い芸人でない二人の出演者が選ばれている。作家のモルドヴァ・ジョルジとスピーチとコミュニケーションの先生モンターギュ・イムレである。二人とも自作の本について語るという形で出演したわけだが、現れ方は違えど二人とも人をそらさぬユーモアの持ち主で、客席はなかなか沸いていた。今回は、モルドヴァ・ジョルジが自著の「金の匂い〜カミオノシュの物語」から三ヶ所ピックアップして朗読している演目をご紹介します。

モルドヴァ・ジョルジは1934年ブダペスト生まれで、主としてルポルタージュと風刺文学の分野で活躍している。「同時代の作家たちの中では最も広く読まれている作家」という評もある。カミオノシュというのは、大型トラックの運転手さん、すなわちこの作品はハンガリーのトラック野郎たちについてのルポなのだ。実際ネットでこの作品を走り読みしたら、国境を越えてヨーロッパ中を走り回るトラック野郎たちの話は面白くて、寄り道して読みふけてしまわないよう、訳者は精一杯自制しなくてはならなかった。

この作家はカーダール・ヤーノシュの信奉者で、体制が変わった今もカーダール政権下の二十年はハンガリー史上最もいい時代だったと公言し、彼の伝記も書いているらしい。なかなかの硬骨漢だが、ラジオ・キャバレーの講演ではちょっと退屈したような物憂げな声で自作を朗読している、それでも税関吏たちの口調を再現するときなんて客席からも大笑いがあがっていた。ちょっと困ったのは、ハンガリーの税関の職員の階級をどう訳したらいいのかという問題で、日本の税関の場合、上級の管理職の人でないと（税関長、部長、課長、係長）階級はつかないらしい。「トラック野郎物語」の中に出てくる税関吏には、軍隊でいうところの中尉ないしは警察の警部補、あるいは曹長に相当する階級がついているのだが、これが日本だとどれに相当するのかわからない。一応部長、係長と訳しておいたが、これは全くのあてずっ

ぼうであることを白状しておきます。

それではスタート

「金の匂い～トラック野郎たちの話～」

モルドヴ

ア・ジョルジ

モルドヴァ：今日日、人間面白いものを読みたいと思ったら、自分のために書かなくてはならないようですな。で、ここで拙著から二、三お話を。最初はもちろん女たちの話です。トラック野郎たちが話しています：

～「女は」彼らによれば「最悪でも橋の下で、ペンキ缶で燃えている燃料油で温まっている連中の間で手に入れられる、4、5分がやつらのノルマだ。そしてもし何か家族のところに持ち帰ったりしたらどうなる！」

「ちよくちよくあることなのかい？」

「雑で不注意なやつは多いんだ。ある運転手がプハッ（\*1）をもらってしまい、帰宅途中で知り合いの医者のもとに立ち寄って診てもらった。医者は処置したが、『少なくとも三週間は奥さんに触れないように』と忠告した」

「どうしたらいいんだ」その運転手は家までずっとその問題をどう解決すべきかと考え込み、立ち止まり、夕食の並んだテーブルをじろじろ見つめた。

「スープはないのか？」

「スープ？夜に？」妻はたずねた。（ヨーロッパではおおむね昼食が一番デラック  
（スで、夕食は軽めですます習慣の国が多い）

「つまりスープもないんだな？」彼はテーブルをひっくり返し、三週間の間立腹を演じ、その間「隔離期間」を守った。～

モルドヴァ：次のテーマは「酒」です。

～彼らに「税関吏たちは酒には何と言う？」とたずねてみた。

「いろいろだね、好意的なやつもいれば嫌悪するやつもいる。俺は一度コニャックを一本、娘の保母さんのために買ってきたんだが、国境で税関吏が気づいた。

「こりゃ一体何です？あんたの車の中にアルコール飲料が現れてはならんはずだが」

「そりゃ、後で娘を迎えに行くとき、娘のめんどうを見てくれている保母さんのために持って行くんです」

「けっこう、事務所に行って、話しあいましょう」

その税関吏は本の販売員だった、やつは俺に『写真で見る1943年までのある中国史』という本を買わせ、コニャックの方は許可した。

もう一つの別のケースでも、基本的な状況は一緒だった。入っていくと、別の税関吏が俺のところで酒瓶を一本見つけたのだ。

「規則違反です、没収、持って行って廃棄します」

「係長さん、それにはおよびません、私が今自分で持って行きますよ」

俺はそれを袋に入れ、彼の後について行った。二歩進んだあと袋を落とし、びんはコンクリートの上で粉々になった、老いた税関吏が私をどなりつけた。

「何をするんだ！」

「同じことじゃないですか！どっちみち廃棄されたんでしょうから」  
～

～「ハンガリーの税関吏たちは」と運転手たちは言った。「誰かがフォリントをごまかそうとすると、何よりも神経質になる。例えばホルバート部長がまさにこのためやってくると、「フォリント狩りの名人」と呼ばれる。このホルバートは心理学のお手本で、国境で一人運転手を選び出すとその車に乗り込んでくる。

「タバコを一本もらえますか！」そう言うくせに彼は喫わない、運転手がボックスを探している間、その手が震えるかどうか見たいだけなのだ。質問することはこれだけである。

「フォリントはありますか？」

「ありません」

「ああそう、それじゃもう一度質問しますが、注意しておきます、もし何か見つけたら、パスポートは没収、あなたに対して裁判所の処置がくだされますよ。それでもフォリントはありませんか？」

「ありません」

「車から出てください、より詳細な税関検査を行います」

ホルヴァートは警察犬のように片方の鼻の穴で匂いを嗅ぎ、常にフォリントを見つけ出す、貼り付けたゴムの敷物の下で、それどころかコーヒーの出し殻の中に隠してあっても。

一人の運転手が静かに微笑んだ。

「一度ホルバートの脇でフォリントが持ち込まれたことがあったんだ」

「一体誰が？君が？」

「俺じゃない、だが当人の手助けはした。ショプロンで入国したとき、突然俺のところに「ユダヤ人」ベーラがやってきて、首にロープがかかっていることを告げた。

「ラツィ、俺は2万フォリント持ち込んだんだ、そしてここにホルバートがいる！」

「なんでそんなアホになれた！」

「知らなかったんだよ・・・」

運転手稼業では「知らなかった」、「そう思っていた」、「忘れていた」の三つは存在しない！

「助けてくれ」

「助けてやるよ、だがお前の三人の子供たちのためだからな。その金をよこせ、それと車のタイヤ止めもだ」

すなわち国道はショプロンでは内側に向かって傾斜している、われわれはいつも支えをして車を停める。俺は金を道路に置いてその上にタイヤ止めを置いた。

「さあこの上にタイヤを乗せろ」

「ユダヤ人」ベーラは車をその上に転がした、ホルバートはそこにやってきて匂いを嗅いだ、その金を見つけ出すことはできなかったのさ」～

訳注1) せっかくネットで原作を発見したので、作者が朗読するとき省いた部分、あるいは「プハッ」で置き換えた部分を再現してみた。

～「女は」彼らによれば「最悪でも橋の下で、ペンキ缶で燃えている燃料油で温まっている連中の中で手に入れられる、4、5分がやつらのノルマだ、一晩で五十人の男だつてやつらの上を通り過ぎていく。そしてもし何か、たとえそれが毛じらみであっても、家族のところに持ち帰ったりしたらどうなる！」

「ちよくちよくあることなのかい？」

「雑で不注意なやつは多いんだ。ある運転手が淋病をもらってしまい、帰宅途中で知り合いの医者のもとに立ち寄って診てもらった～以下略～